

平成27年度群馬県立自然史博物館活動の評価について

群馬県立自然史博物館専門委員 石川 貴敏

平成27年度の同館における事業活動は、活動目標に対して適正に行われたことを確認しました。前年度を上回るだけでなく、開館以来2番目に多い188,680人を記録した年間入館者数（実観覧者数）は、同種の施設と比較して高い成果と捉えています。評価委員会当日に拝見した開館20周年記念展「超肉食恐竜 T.rex Episode II ティランノサウルスへの進化」に代表されるように、同館の企画展・特別展、さらに教育普及活動は、独創性と工夫に満ちており、限られた予算の中、観覧者や参加者を刺激し楽しませるものとなっています。これからも高い目標を掲げながら、現在の取組を発展させてもらいたいと思います。

こうして博物館の事業活動が多岐にわたることにより、利用者との接点はますます多様化しています。館内事業、館外事業、インターネット利用などを含めた博物館の利用（者）について捉え直すことで、同館の事業活動に即した利用動向を把握することも必要ではないかと考えます。

一方、外部（館外）に保管場所を確保しながらも収蔵スペースの不足は解決に至っていません。個人所有者などからの寄贈が増えることが予想される今後の状況に対応するためにも、早期の改善につながることを望みます。また、内部評価で課題とされていた市民参加型調査や市民連携の調査、友の会やボランティアの主体的な活動の推進、他の博物館との連携強化・推進は、対話と連携を進めるこれからの博物館には必要な取組ですので、より一層の推進を求めます。

評価委員会では、平成28年9月に発行された「開館20周年記念誌 群馬県立自然史博物館20年のあゆみ 1996～2016」に収録された「博物館基本構想—群馬県立自然史博物館これからの10年—」を拝見しました。同構想には、素晴らしい理念や方針が掲げられており、同館が「自然史情報拠点」「連携協働拠点」「知的探究拠点」として機能する姿をわくわくする気持ちで思い浮かべながら通読しました。この基本構想を一層広めていただき、県民や利用者の方々とこれからの同館のあり方に対する意識の共有を図りながら、国内を代表する自然史博物館として30周年に向けて活動していただきたいと願っています。

「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第4次基本方針）」（平成27年5月）、「日本再興戦略2016」（平成28年6月）、「明日の日本を支える観光ビジョン—世界が訪れたいくなる日本へ—」（平成28年3月）など、国が最近打ち出した施策には、博物館の充実や博物館への期待とともに取組内容が記されています。UNESCO 総会で採択された勧告「Recommendation on the Protection and Promotion of Museums and Collections, their Diversity and their Role in Society」（2015年11月20日採択）やICOM Kyoto 2019に向けた今後の動きも踏まえながら、次代にふさわしい博物館像を描いて欲しいと願っています。